

「宮城道雄をしのぶ箏の夕べ」は

永くなかった50年

「宮城道雄をしのぶ箏の夕べ」は、こんどの第50回でシリーズの幕を下ろします。永きにわたり、まことにありがとうございました。

中島 私こそ、お礼を申し上げます。50年間は決して短くはございませんが、私は“永かった”と思っておりません。それは、このシリーズ演奏会は大阪新音のご主催ではございましょうが、宮城道雄先生のお名前が冠されていることもあり、私どもは“自らの演奏会”と考え、取り組んできたからでございます。また、演奏会の目的として“宮城道雄の業績と作品を伝える”とされていますので、それに恥じない企画、演奏を行うことを目指してきました。ですから、永かったどころか“もっと”という思いでございます。

「宮城道雄をしのぶ箏の夕べ」は1973(昭和48)年にシリーズを開始しました。企画について、その数年前からご相談していたと思います。

中島 当時は大阪労音でしたね。「労音」には昭和30年代から、大阪にかぎらず各地から演奏のご依頼をいただき、ご縁がございました。ただ、当時の「労音」は洋楽、とくに軽音楽やポピュラーなど流行音楽の演奏会を主にしておいででしたので、出演には戸惑いもございました。それでも、たまに開かれる「笑い」邦楽演奏会にはたくさん会員の方にご来場いただき、熱心にお聴きになられていたのをよく覚えております。

「宮城道雄をしのぶ箏の夕べ」に関しましては、1970年の大阪万博のころだったと思いますが、大阪



「宮城道雄をしのぶ箏の夕べ」で演奏する
須山知行さん、中島警子さん（1990年頃）

労音の企画担当の役員さんと事務局の方が須山知行先生と私のところにおいでになり、「日本の伝統音楽や芸能をもっと若い人に聴いてもらおうというのが現在の方針です。ついては近代邦楽を革新された箏曲界の大家・宮城道雄師をテーマに、しっかり構成された演奏会を、シリーズで開きたい。ぜひご協力をお願いしたい」と熱心にお話しになりました。

その頃、須山先生も私も、桐絃社主催の演奏会や一門の指導、関西一円の邦楽演奏会への客演、それに大阪音楽大学でも教えておまして、2足も3足もワラジを履いておりましたので「笑い」ずいぶん迷いました。でも須山先生が「万博を機に日本人が世界に目を向けるのは大いに結構だが、自分たちの国の文化・芸術を知らずして真の国際交流はできない。大阪労音さんが持ってこられた演奏会の趣旨が“日本の伝統音楽や芸能をもっと若い人に聴いてもらいたい”ということなら、お引き受けしようじゃないか」と仰られ、こ

の企画が動きだしたのです。

須山先生と相談いたしました。このシリーズ演奏会は単に宮城先生の業績をしのぶだけでなく、新たな発展につながる内容にしようと考えました。そして当時、邦楽研究者として活躍していらした平野健次先生、久保田敏子先生らにご助言をいただき、作品の系譜をたどるだけでなく、トップクラスの奏者をお招きして、皆さまに一流の演奏を聴いていただくことを心がけることにいたしました。

意気込んで始めた演奏会

シリーズ第1回は1973(昭和48)年6月23日、大阪市西区の大阪厚生年金会館中ホールでした。

中島 なつかしゅうございます。記録を見ますと、プログラムは、うてや鼓／水の変態／数え歌唄変奏曲／春の海／虫の武蔵野／さくら変奏曲／越天楽変奏曲と、全曲、宮城先生の作品でございました。曲間(幕間)には、平野先生のお話と俳優さんによる宮城先生の随筆の朗読を入れていただきました。